

2024 年 4 月 27 日(土)夜 『神聖で繋がり合う日』 メール前文

心の中に内なる平和を築くためには、自分の内に存在しているあらゆる自分を認め、消えてゆく姿として抱きしめてあげることが大切です。長年祈り続けてきた方々の中には、日々の祈りや印といった各種行の実践と共に、自身の心の内側にそれを実践することで、把われの想いが随分と薄れてきたことを実感されている方も多いと存じます。

一方、あらゆる自分—ありのままの自身を認め消えてゆく姿として抱きしめるのが良いといわれても、どうやって認めればいいかがわからないと思われる方もおられます。そこで、土曜夜の『神聖で繋がり合う日』は、心の内にあって”消えてゆく姿という天使の羽”を持たないが故に、くすぶり続けているあらゆる自分を解放するための取り組みを行ないます。

ここで何十秒か眼を閉じて、ご自身の心の中を覗いてみてください。「いやいや、何も見えないよ」と思われる方が多いと思います。それはその通りです。そのためにこそ、私達はたくさん的人类に分かれて生きているのです。

何を言いたいのかと申しますと、『自他に感じる思いこそが、自分自身の投影である』という従前の話であります。特に内省の時間が少ない方にとっては、他人に感じる思いこそが自分の中の把われ、即ち消えてゆく姿を示唆しているのです。

特に、近い家族や親族、友人、仕事上の密接な交友関係においては、自分自身の認めたくない内面を映し出して見せて（気付かせて）くれています。ですから、人間関係での悩みを解消したいと思われる方は、人を悪く思う想いの癖や自分を守ろうとする想念習慣を、すべては自己責任—自分事として観て成仏させてあげることをお勧めします。

人類を創造した私達の命の源が自らの命をたくさん的人类に分け現わしたことは、『神と人間』に書いてあるような根源的な理由と共に、私達が神である本質をいったんは忘れ、波動が粗い世界の開拓に従事するにあたり、個々が自分自身を見失わぬよう、自らの命をたくさん的人类に分け現わした側面もあります。その意味で地球人類は、人間関係を通して自身を知るように創られているといえます。

もちろん、空気にも大地にも水にも、生きとし生けるもの達にも、私達自身が映し出されていますが、それらに感じるのは思いが疼かないレベルの生命における客観性ですので、特に人間同士の間で感じる思いに注視して自分に向け直すだけで問題ありません。

人は、自分の中にそう思う原因のないことを思うことが出来ないものです。だからこそ、一人の人物を複数の人が見たときに、人それぞれの感想が生じるのです。脳裡をよぎる想念も、思わず口をついて出る言葉も、すべては自分自身を表現している想念であり言葉なのです。他者を評して表わしていると思い込んでいた想念や言葉が、実は自分自身のことを語っていたともいえるのです。

そこで冒頭に書いたように、心の中に内なる平和を築くためには、自分の中に存在しているあらゆる自分を認め、消えてゆく姿として抱きしめてあげることが大切だという、冒頭の話がクローズアップされてきます。

そうは申しまして、心のひだに張り付いている自分を認めることが出来なければ、消えてゆく姿にして手放すことも出来ません。消えてゆく姿であると認定することが出来なければ、抱きしめる対象もわからないままです。

本当に効果的な消えてゆく姿を実践するためには、『ありのままの裸の心を見つめ他に感じる想いの実体を自己の内に認める ➡ 消えてゆく姿という名の天使の羽を与える ➡ 有りのままを解き放った意識で在るがままのすべてを抱きしめる』という流れを踏み行なう必要があります。(最初から達人クラスの方は、そうした細かいプロセスを意識することなく、本質を外れた想いの癖をスッと消えてゆく姿にできるかも知れませんが...)

前述のように、有りのままを認め、消えてゆく姿として手放し、在るがままを全肯定するはじめの一步は、他人に感じる想いを自分に向け直し、その原因を自身の内にいさぎよく認めることです。その練習を積み重ねてまいりますと、自他をジャッジする想いの癖が薄れてきます。

そしてもう一つ大切なことは、神聖復活を目指す私達は、善なるこだわり・思い込み・決め付け・執着さえも掴むことなく、消えてゆく姿にする必要があるということです。それが出来れば、私達は思い込みの洞窟から神聖時空の無限なる世界へ踏み出すことが出来ます。

土曜日の夜は、ネガティブな扱われはもちろんのこと、善への扱われさえも解き放って、すべてを包括的に愛し赦している神聖の意識視座を、参加者全員で確認する日にしてまいります。

2024 年 4 月 27 日(土)夜 『神聖で繋がり合う日』 初めの話

皆様、こんばんは。夜のズーム祈りの会を始めます。

地球に本当の平和を築くためには、そこに住む私達ひとりひとりの中に、心の平和を築き上げる必要があります。また、心の中に内なる平和を築くためには、欲望や偽善、自分や他人を責め裁く想いのすべてを手放す必要があります。

そのためには始めに、今まで見て見ぬふりをしていたり、そもそもまったく気にも留めなかったりしていた”手放すべき様々な性質”を心の中に直視して、その存在を認める必要があります。

私たちを見守りお導きくださる守護の神霊方は、そのために様々な手段を講じて、私達が手放すべき想いの癖に気付かせようとしておられますが、閃きを与えても受け取らず、周囲の人を使って諫言させても反発するなど、肉体人間は他人のことはとやかく批判・非難・評価するわりに、自分のことは客観的に観ることが出来ずにいる人が多いといえます。

守護の神霊方のご苦勞が忍ばれる話ですが、そこで悟りを開く奥の手として神々が用いたのが『鏡の法則』です。天理教教祖は、「この世は鏡屋敷だから、自分を変えれば相手が変わる」と説かれました。

また五井先生は、次のようなお話をされたことがあります。

我在るがゆえにみんなが在るんでしょ。そうすると、この世の中に在るものは自分だけなんです。いいですか。自分ただ一つが在る。宇宙神の中の自分が一人在るだけなんです。ここにね……。だからいいことも悪いこともね、誰の責任でもない。自分の責任なんです。だから自分が偉くなるより仕方

がない。わかりますね。自分の心を正しく、本当に神のひびきと一つにすれば、自分のまわりに現われてくるものはすべて、神のみ心が現われてくる。みんな神さまの心になって現われてくるわけです。だから自分の前にどんな悪い人が出て来ようと、それは自分の責任なんですよ。自分のひびきがそこに現われてくる。現われて来たものに文句言うより、自分に文句言う方がいいけれども、文句言っても仕方ないから消えてゆく姿にして、世界平和の祈りの中に入れちゃいなさい。

ということで今日は、はじめに世界平和の祈りを行ない、他人(ひと)に感じる想いを自分に向け直す練習と、自分を責め裁く想いを解きほぐす練習をして、最後に神聖復活の印を 21 回組んで終わりにいたします。

それでは時間になりましたので、世界平和の祈りを日本語と英語で行なってまいります。

1. 《世界平和の祈り》

2. 《自己開放の時間》

2-1. 他人に感じる想いを自分自身に向け直す時間

次は、他人に感じる想いを自分自身に向け直す時間に入ります。どうしてそれがよいのかと言いますと、他人に感じた想いが自分の内面を映し出しているからです。

これから音楽を流しながら話しますので、神聖の視座を意識して、もしくは意識の重心を臍下丹田に鎮めて、ご自身の想いの中で起こっている心の動きを振り返ってみてください。《音楽が鳴ります》

他人に感じた想いが自分の内面を映し出しているということが、どうしてそう言えるかと申しますと、完全に神聖の波動圏に入り込んで神としてこの世を俯瞰しているとき以外、即ち肉体に張り付いた意識で生きているときには、私達の意識は、五感に感じた想いを通して自身の内面を知るように創られているからです。そのような意味で私達は、全面鏡張りの世界に生きています。

しかしながら自己中心性の想いの癖に流されておりますと、見渡すかぎりの鏡の世界に生きているにもかかわらず、「誰がいい・誰が悪い」「あれは好き・これは嫌い」「それは正しい・どれは正しくない」と、外へ向かって批判・非難・評価のジャッジメントを繰り返します。

それではどんなに祈り印を組んでも、世界に対しては光を振り撒いていながら、自らに対しては把われの想いで相殺してしまい、プラスマイナスゼロ前後で行ったり来たりしてまいります。そうなりますと、なかなか自分自身が調和せず、神聖復活を実感するのに時間がかかる、ということになります。

そのような本当の事実—他人に感じた想いを自らに向け直せない原因は、一言でいえば、エゴさんの抵抗です。エゴさんは、私たちが神聖復活すると大変お困りになられます。彼らは私達が神聖復活を果たすと、自分の居場所がなくなってしまうと思っています。ですから、防衛本能でもって私達の想いの習慣をネガティブな状態に留めようと働きかけているわけです。

「あの人は嫌な人だなあ」「羨ましい」「妬ましい」「恨めしい」「面白くないなあ」「なんでこの人はこんなに自分勝手なんだろう」「なんであの人は私を責めるんだろう」「なんでこの人は、私のことをわかってくれないんだろう?」「認めてほしい」「愛してちょうだい」「お前は俺の思い通りに動いて然るべきだ」「自分の考えの通りにこの人を動かしたい」等々のように、他人との関わりの中で、他人に対して

とやかく想い、疼いているあらゆる心の動きは、エゴさんが消えるプロセスであり、過去世から現在に至る想念が清算されている状態、バランスを調整している波動調整の瞬間の姿であって、私達の本心から出てきている神聖の想いではありません。

私達の本心、真実、宇宙を創造し運行し続けている大いなる力、無比絶対なる無限なるいのちの光があります。私達を動かすそのいのちの力は、すべての存在の中に宿っています。その意味で、私達の意識がいのちの大元と直結しているときには、私達は皆一つ、ワンネスであるわけです。

ですから、一ついのちであることを自覚しているときの私達は、自他を分断して上だとか下だとか、好きだとか嫌いだとか思わず、すべてを抱擁している神意識であるわけです。

今日、ここに参加しておられる方の中で、何十年も祈り続けてきながら、手放せない想いを抱えていると思い込んでおられる方がいるかも知れません。またこれまでに、一生懸命に祈り、印を組んできたにもかかわらず、「私はなかなか神聖復活したという自覚・自信を持つことが出来ない」とご自身を卑下して観られている方がおられるかも知れません。

もしそのような方がおられましたら、そういう想いがあったとしても、そんなことで私達の価値が下がるわけではありませんのでご安心ください。私達は他人を通して様々な想いを抱えています。このような祈りの場においてさえも、誰が上だとか下だとか、あの人は出来ているけど自分は出来ていないとか、あの人は素晴らしいなあ、神聖を顕わしているなあとか、いろいろな想いが脳裡をよぎることがあります。

それがいいでも悪いでもないのです。それらの想いはすべて、自分の内面を他人という鏡に映し出して観ている状態です。ですから、そのときに感情想念がうごめいていても、それらの想いを嫌わないで、見て見ぬふりをしないで、そう思っている自分、把われを手放せない自分、自信を持てない自分、駄目だなあと思っている自分、妬みや羨みとなってくすぶる想い、過去の被害意識から誰かを悪人のように観て何十年も許そうとしない想い、周囲の人を見下す想いの癖等々、すべての加害者意識と被害者意識を、まずは受け容れ、認め、抱き締めてあげてください。

一度受け容れましたら、その対極にある自分も心の中に探してみてください。自分で見つけられないと思われる方は、守護霊様に聞いてみてください。直観を通して教えてくださいます。

例えば、人を羨んだり妬んだりしている想いがある場合でしたら、その想いを自分に向け直すと、自己卑下することが正しいと思い込んでいたり、自分を見下していたり、自己の尊厳を足で踏みにじっていたり、自分を赦さずいじめることに快楽を感じるサディストな自分がいることがわかります。

一般的に、サディズム・加虐嗜好とは、他者に痛みを与えて快楽を得るという意味の病理概念ですが、自分の神聖に自信が持てない場合は、「あの人は出来ているけど自分は出来ていない」のように、自分と他人を比較して、自身を低い位置に置くことで満足する想いの癖です。

「卑下高慢 いずれもいのち汚すもの おのれをしかと打ち出さむのみ」という道のお歌がありますが、誰でも高慢がいけないのはわかりますが、善人の中には、卑下が悪いと思わない人が多いのも実情です。ですから、「自信を持ってください」と耳にタコができるほどいわれているわけです。

他人と接して自らを卑下する想いは、心の中では加害者として自らの神聖を否定して、自分を貶めて満足しています。ということは、その反対の自分もいるわけで、自分に神聖を否定されて、「自分には神聖があるはずなのに顕わすことが出来ない」と悶々としている自分も存在しています。

そのように、私達の顕在意識と潜在意識は一筋縄ではいかないほどに入り組んで混沌としています、他人に感じた想いを通して見つけた片側の自分をきっかけに、プラスとマイナス、被害者と加害者のような、両面の自分を観て、「そうであってもかまわないんだよ」「そう思ってもいいんだよ」「あなた方はそのままでいいんだよ」と声をかけてあげることで、即ち、存在を認めてあげることで、心の中の陰陽のバランスが調ってゆきます。

そのような練習を重ねてゆきますと、一瞬で心が明るくなるほどの効果があります。最初にそれを体験した時に私は、「今まで何十年も悩んできたのはなんだったんだろう」と思いました。

他人が何をしてくる、何を言ってくる、そのことで私達の心は犯されるものではありません。ただ、自分が自分にしていたことを通して、私達は傷ついたり悩んだりしていただけたのですから…。

2-2. 自分を責め裁く想いを解きほぐす時間

それでは、自分を責め裁く想いを解きほぐす時間に入ります。先ほどと同じように、音楽を流しながら話しますので、神聖の視座を意識して、もしくは意識の重心を臍下丹田に鎮めて、ご自身の想いの中で起こっている心の動きを振り返ってみてください。《音楽が鳴ります》

自分を責め裁く想いは、他人を批判する想い、他人を赦せない想い、思い通りに他人を動かしたい支配欲、他人に対する不平不満、他人に対する憎しみや怒りが炎となって燃え盛る想い等々を通して、心の内にその存在を確認することが出来ます。

それらは、自分を赦さない自分、自分を神聖の存在と認めない自分、自己限定している自分、自分を責める自分、自分を赦さない自分、自分を愛さない自分となって、心の中で活動しています。

想いの性質は、想い続けに思わなければ、簡単に手放すことが出来ます。消えてゆく姿にするのも簡単です。しかし、想い続けに思った場合は、想いの塊が大きくなって、後からそのことに気付いた時点で解消するのに大変な苦勞をしがちです。

そこで私は、「どんな想いが表われても、ブツッ、ブツッ、ブツッ、ブツッと、ブツ切りにするのがいい。想いの雪だるまをゴロゴロゴロゴロと転がし続けて、にっちもさっちもいかないほど大きくしなさんな」と、近い人には話しています。

例えば、自分を責め裁く想いとは直接の関係はありませんが、病気になり体が痛むとき、痛い、辛い、苦しいと思うのは人情ですが、「痛い、ブツッ」「辛い、ブツッ」「苦しい、ブツッ」と、その場その場で想いを切り離してまいりますと、「自分は病んでいる」という自己認識が大きくなりませんので、自然治癒力や薬、お医者さんの治療で、思ったよりも早く治ります。

自分を責め裁く想いも、想い続けに思わなければ、案外早く手放せて、いのち本来の輝きを取り戻し、明るく前向きで、楽天的かつ向上心に満ちた無限なる可能性に満ちた本来の自分を取り戻すことが出来ます。

そのためには、先ほどお話ししたように、他人に感じた想いを通して、他人に感じた想いを自分に向け直して、実は自分を赦していなかった自分、自分を神聖の存在と認めていない自分、自己限定している自分、自分を責め続ける自分、自分を愛していなかった自分を観て、その反対の自分も観ることです。

それは、自分に赦されていない自分、自分に神聖の存在と観てもらえていない自分、自己限定の足枷をつけられて自由に活動できないでいた自分、自分に責められ続けている自分、自分に愛されずに凍えている自分等々です。

そうした相反する両面の自分を同時に観ることによって、私達の心の陰陽は調い、無限なる可能性が発動して、出来ないと思い込んでいたことにチャレンジする自分、嫌いだと思っていた人に心を開く自分、低く見ていた人の神聖をハッキリと認められる自分、勇気が出なくて出来なかった神聖の言動行為を堂々で行なっている自分が顕われてまいります。

また、自分を責め裁くにも、その理由は様々で、能力的な面での自己否定・自己限定もあれば、過去の過ちを赦せないがゆえの責め裁きの状態もあれば、相手が良くならないのは自分のせいだという、勘違いも甚だしい思い違いもあります。

どんな性質が残っているように見えても、私達の過去世から持ち越してきた業因縁はもう燃え尽きて存在していないのです。五井先生は、2018年12月2日日曜日に、このようにおっしゃっています。

「神聖復活(目覚め)の印を組む者達にはもうすでに過去はない。過去はすべて消え去った。古い記憶...苦悩・恐怖・不安の記憶が心に湧いてくることがあっても、それらはもはや全く過ぎ去ってしまったものである。

過去はすべて完璧に焼き尽くされたのだ。あるように思えてもそれらは、焼き尽くす際に生じた黒煙や灰燼に過ぎない。それらの煙や灰には、何一つのエネルギーも力もないのだ。

「まだ過去が残っている」と思ってしまうのは、想念が再び三度とその煙や灰を捉まえ、何の力もエネルギーもない過去の記憶によってそれらを認識し、わざわざ引き戻そうとする想念行為である。

神聖復活(目覚め)の印が神人達により降ろされた現在、自らの過去世から今日に至る苦しみ、悩みは完璧に消え去り、光に昇華されたのである。

おめでとう、神人達。そして、ありがとう。みんなのおかげでこの世界は蘇るのだ。本当だ。平和な世界、神聖なる世界が再び地上に訪れるのだ。

そのあなた方の神聖復活の体験を多くの人々に伝えてこそ、世界人類は完全に納得し、理解するに至るのである。」

そのあとに昌美先生は、「記憶の手放しこそが過去を掴まないコツである」という意味のお話をなさいました。

今日行なっていることは、その記憶の手放しを効率的に行なうひとつのやり方、方法でした。

3. 神聖復活の印

最後は、神聖復活の印です。「はい」と申し上げましたら、ご一緒に宣言をしてお組みください。7回連続を3セット行ないます。それでは始めます。はい。

<一回目の宣言>

**私達はすべての自然と一つに結ばれています。
すべての自然の天命は完うされています。**

<神聖復活の印を七回連続>

<二回目の宣言>

**私達はすべての生物と一つに結ばれています。
すべての生物の天命は完うされています。**

<神聖復活の印を七回連続>

<三回目の宣言>

**私達はすべての人類と一つに結ばれています。
世界人類の天命は完うされています。**

<神聖復活の印を七回連続>

以上